筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第四十四回）

「名告藻（莫告藻）と万葉集」

～羈旅に思いを發す～

志賀の海人の　磯に刈り干す　名告藻の　名は告りてしを　なにか逢ひ難き

巻十二―３１７７作者・未詳

（解説）志賀の海人（漁夫）が磯で刈って干す「なのりそ」のように、名前を告げたのに、どうして逢うことができないのだろうか。

・古代には「名乗り」は求婚の意味をもち「名乗り」にあたっては、男性がまず自分の名を名乗り女性に名乗りを求める。このときに女性が男性に名乗れば求婚が成立する意味であった。

・「名告藻」は万葉辞典等では「莫告藻」のことで【ホンダワラの古称で和歌では「名告る」を導く序詞として用いる。】とある。万葉集にも枕詞として「あずさ弓引津の辺なる莫告藻の花咲くまでに・・・（巻十―１９３０）」など数首に詠まれている。

・ホンダワラは【牧野日本植物図鑑】には「東北から九州まで広く分布し干潮線付近、およびその下部に生ずる。質は柔らかく高さ1～4ｍ位。」とある。岩に付着して生育するが、夏になると流れ藻になる。古来、新年の飾物、および食用、肥料として用い、総称。ホダワラ。ナノリソ。タワラモク。浜藻ともいう。また、最近では醤油の原料として重宝されている。

この万葉歌の題詞は「羈旅（きりょ）に思いを發（おこす）す」即ち、作者が旅先にあって思いを述べた歌の一首である。

・この歌にある地名「志賀」は、福岡県福岡市東区に所属する博多湾口東にある南北に長い楕円形の島「志賀島」のことで、全国的にも非常に珍しい砂州である「海の中道」により九州本土と陸続きになった陸繋島（りくけいとう）である。島の南部と西部は博多湾に接し、北部と東部は玄界灘に接する。北部から東部にかけての沿岸は岩場が続く。

・志賀島は周囲約八キロの小島であるが、古代日本（九州）の大陸、半島への海上交易の出発地として、歴史的に重要な位置を占めていたため多くの歴史が残り「歴史ロマンの島」とも呼ばれている。

・また、志賀島は古来、海人（あま）（漁夫）の島として名高く、この歌の作者は任を受けて旅路にある官人が旅先の志賀で海人が磯で刈り干す「莫告藻（なのりそ）」を見て、好きな女性に求婚の意味で自分の名を名乗ったがどうして逢うことができないのだろうと思い浮かべているのであろうか。

（参考文献）万葉集を知る事典、佐々木信綱「万葉辞典」、牧野日本植物図鑑、犬養孝著「万葉の旅」等

（写生地）「莫告藻（なのりそ）」即ちホンダワラは岩に付着し生育する海藻である。

・志賀島でホンダワラの生育しやすい岩場の多い東北部の玄界灘沿岸地帯を描く。（杏花）

（志賀島位置図）―所在地・福岡県福岡市東区志賀島